

生産者の顔が見えるお茶づくりを技術面で応援

4月、五和小3年生たちが、新品種「金谷いぶき」と「金谷ほまれ」（以下「いぶき」「ほまれ」）の新芽を丁寧に摘み取りました。この2品種は、平成21年3月19日に農林水産省に品種登録されたもの。その生みの親が、水野さんです。

【新品種の誕生】

中学の頃から園芸が好きだった水野さんは、茶の開発や技術援助をしています。「企業だと分業など、時間の縛りがあるから、30年に1品種を作り出すのがやっと。個人でやっているから、半分くらいの年月で2品種も登録できたんだよ。農水省では、DNAまで調べるから大変なんだ」「いぶき」と「ほまれ」の誕生は、早生品種の「摩利支」と「さやまかおり」を交配して、良さそうな芽を見定めるところから



始まりました。その若木を植え、また10〜15年掛けて選び抜いたので。そうして「やぶきた」よりも適採期が一週間以上早く、収量や味もよい新品種の開発に成功しました

【品種開発にかける情熱】
「全国どこでも栽培できる品種では、地場産業の強みがなくなる。農水省で登録されれば、特許を取ったのと同じように、ここにしかないお茶



茶研究家 水野 昭南 さん（番生寺）

た。「早生品種だと気候の変化が心配だね。霜の影響を受けると摘採期が遅れちゃう。だから摘採時期には、毎朝3時くらいには起きて様子を見に行ってるよ」

になる。そういうお茶で、茶農家や地場産業を盛り上げた「いぶき」と水野さんは熱く語ります。「開発は難しいけどね、誰がなんと言っても『やってみないと分からない』

と思っているんだよ。失敗したって次に生かせばいい」やぶきたも、開発されてから県下に広まるまでに、およそ一世紀かかりました。「新しい2品種も、百年以上かけてでも、少しずつ輪を広げていくつもりだよ」

【来たれ、後継者】

「どんだん発想がわいてきて、残りの人生でやりきれない」と笑う水野さん。その開発意欲は、「匂いを全て消す菌」など、お茶の開発だけにとどまりません。真剣になって取り組む後継者がいれば、その想いや技術を伝えていきたいといいます。

「いぶき」「ほまれ」を金谷で育成し、その普及と地域振興を目指して活動しているMS会は後継者の一つ。「Mは摩利支、Sはさやまかおりを指すんだ。地元の茶農家と茶商で構成する仲間たちだよ」近々、「希望の芽」を含むもう2つの新品種登録を控えています。まさに、これから茶業の希望の芽を育てる水野さんの挑戦は続きます。



新品種を丁寧に摘み取る五和小3年生たち



Shimadian File #36